

山本五十六元帥怪死のナゾ (1)

安 西 二 郎

The Enigmatic Death of Admiral Yamamoto

Jiro Anzai

昨年度は大阪大学の待兼山キャンパスでもたれた日本心理学会第四八回大会の原理部門の座長をつとめるかたわら、自身の研究論文「零戦とグロスターF5/34の歴史心理考」を発表し、本年度は本年度で、阪大での名(迷?)座長ぶりをかわれたか、再度座長をつとめる光榮にあずかる一方、自己の口頭発表「軽井沢心理学散歩②——いわゆる軽井沢シンドロムについて——」を七月末に行い、八月二日には年来想をねって来た『軽井沢心理学散歩』を松下幸之助氏ゆかりのPHIP研究所より刊行したばかりである。何しろ夏のお盆をひかえて書評子諸子もそれぞれの故郷に散っていかれたらうし、軽井沢自体がこの頃になるとシーズンの半ばを過ぎていたので、書評子によるとりあげさえほとんど期待していなかったのだが、集英社の文芸批評誌「すばる一〇号」がいち早くとりあげ、学習院大学の篠沢秀夫教授によるベタボメに近い好評が、七・五ポイント活字二段組の十ページにわたっているのは驚いた。だが、炯眼けいがんの篠沢教授の御目にもとまっていけない拙著

のある個所こそ、実は筆者が八月十五日の終戦記念日にちなんで、総ての同朋、なかんづく、太平洋戦史に心をよせる人の目にふれることをねがっている点なのだ。

その点とは他でもない、拙著『軽井沢心理学散歩』の二〇四頁にみえる「が、山本五十六のナゾで最もわからないのは、山本がかつぎや(超心理に弱い人物)たることを知りながら、あえて山本の身辺に不吉なイヴェントを構築し続けた(四のつく月日や時間)に、作戦を發動するように画し続けた)側近の某人物の言動の不可解さである。」という一節に凝縮されているが、言いつのれば優に数巻を要する、太平洋戦争にまつわる「ひた隠され、歪曲わいぎょくされた歴史」の真相や深層にかかわる問題なのである。それにしても、旧軍人でもないどころか、『京都心理学散歩』とか、『茶道の心理学』とか、『日本の色』とか、ひたすら雅美とわびの世界にひたっているブルジョワの坊ちゃん族のお前さんが、いったい今頃になって何故に、オドロ／＼しき太平洋戦争のナゾに向う

のか、不可解だとの評もあるが、そういう方々は、わが安西家の空と海への深く長いかわりを御存知ないのである。

わが安西家は岡部公爵を城主にいたたく旧岸和田藩士族であるが、明治維新以降は大阪の堺や旧満州国の大連で活動していたのである。というわけで、堺の大阪に大正十二年から開かれていた井上長一氏の水上飛行場（日本最初と言われる民間の定期航空路機の整備基地でもあり昭和二十年の終戦の日まで存在していた）が、少年期の筆者らのかっこうの遊び場となったのも当然であるが。

奇しくも、かの太平洋戦争中のほぼ全期間を名航空参謀として戦い抜き、今日P.H.P.の顧問をしておられる奥宮正武中佐の兄こそ、他ならぬこの大浜の堺水上飛行学校におられた航空機関士だったのである。この奥宮中佐の自伝とも言うべき『さらば海軍航空隊』⁽⁴⁾には、兄君の別府沖での行方不明（飛行機事故による）のニュースにきびすを接するように、自身の海軍兵学校合格通知電報がまいこんだことが記されているが、奥宮中佐自身も事故死された兄の衣鉢をつぐように、航空界に身を投じ、奇しくも山本五十六大将の媒酌で結婚された方なのである。この点は、後になって筆者が解説しようとする山本五十六長官怪死のナゾに迫る一つのカギともなるので、心にとめておいていただこう。

それにしても「ナゼ今五十六なのか？ どうしてお前さんは、そんなに山本五十六に関心を抱くのか？」と言われれば、米のエドガー・アラン・ポーの高名な暗号解説小説『黄金虫』の耽読と、父子相伝といってもよい、H・O・ヤードリイ著『アメリカン・

ブラックチャンパー』が、一種の開発刺激となってかきたてられ肥大化した軍事謀報史への関心と傾斜にあったのだ、としか言いようがないが、よく考えてみれば、海軍への傾斜も、むしろ父源と言えそうである。思えば、亡父の若き日の出世作からして『軍艦茉莉』なのである。息子の私が、正史秘史を問わず、軍艦に関心をよせ始めるのも、当然だろう。更に言えば、この亡父の記念すべき詩集の出版年月日こそが、昭和四年の四月十八日なのだ。

これまた第三者には何のことかわかりにならないだろうが、この昭和四年の四月とは、わが父安西冬衛の詩集『軍艦茉莉』が世にラウンチされた年月日であるばかりでなく、山本五十六の誕生日（四月四日）を想起させる型で、筆者の説く四の呪いの連鎖が、山本五十六の生をめぐって発生し始めた歴史的な年でもある。

月刊文芸春秋の注意深い通読者ならば、昭和四十一年九月特別号に、筆者の論文「四に魅いられた海軍」が掲載されており、山本長官の誕生日が単に四月四日であるのみならず、悲劇の太平洋戦への旅の出陣式さえもが、昭和十六年の十二月四日におこなわれていることに始まり、相当にイデオシンクラチックなナンバー・フィクション論を展開していたことを想起されるだろう。思えば、四の呪いにもひとしい不吉な事件や事象の発生は、何も開戦直後からではない。

昭和四年四月、山本五十六は大佐で空母赤城の艦長であったが、

この時山本の命令で発艦した全飛行機が不意に襲って来た霧のために、全機喪失したという件があったのである。

更に言えば、昭和十年の九月二十七日、三陸沖で発生した第四艦隊事件（暗号書の機密を守るため、切断後転覆漂流中の駆逐艦初雪の艦首部〔そこに11の記号が白く描かれていた〕を味方砲で撃沈し、一気に味方兵士の生命四十二人をうばった件）の査問委員であった人物こそ、余人ならぬ山本五十六中将と古賀峰一少将（階級はいずれも昭和十年の事件当時のもの）だったことや、これらの仁者の権化のように一般にはうけとめられている両将が、この件に対しては、冷厳な対処をよしとしていたこと、更に、七十年の連合艦隊史の中で、この二人の第四艦隊の査問委員者となつた長官のみが、昭和十八年四月十八日と十九年四月一日と、相次いで、四月に怪死の厄にあつてゐることを指摘しておいた。

が、四の呪いにも似た凶相的頻出発生は、これのみではない。真珠湾からマレー半島沖にいたる洋上において、一見勝利の連続にみえる緒戦期においてさえ、ウエーク島占領の任をあたえられていた第四艦隊のみは、ピッコック岬沖の四千メートルに接近したものの、陸上砲台と四機のグラマンF4Fにすすくめられ、駆逐艦二隻と上陸支援艇二隻の計四隻を失ない挫折せしめられていたのである。更に言えば、悲劇のミッドウェイ海戦の前哨戦とも言うべき珊瑚海々戦においてさえも、わが第四艦隊は初日に小型空母祥鳳を失ない、翌日には、雲母瑞鶴の飛行隊の全滅に近い損失と翔鶴の甲板への四発の爆弾命中のため、退却のやむなきにい

たったのである。のみならず、六隻の大型空母でやるハズのミッドウェイには、赤城、加賀、蒼竜、飛竜の四隻（死相）しか参か出来なくなり、結果として、あの目をおゝいたくなるような大敗をきつしているのだ。

「しかも、山本五十六、ひいては日本海軍の戦運がつきをはなれ、世界史の転回点といわれるミッドウェイ海戦における、わが空母四隻喪失の日は、六月四日のことである（日本側の記録には五日とあるが、ミッドウェイ海域は日附変更線の彼方にあるため、実際には四日。」と拙文にもあるように、四の呪いにも似た凶相連鎖は次々とからみつくように、発生しているのだ。

思えば、ミッドウェイ海戦こそ、山本が強硬に主張したもので、その余りの投機性ゆえに、歴戦の航空士官や山本の幕僚にも、真に双手をあげて賛するものはなかったことも、今や大方のしるところだ。

炯眼の山本長官が、運命の片道飛行となつたラバウル↓ブイン行の日〓昭和十八年四月十八日が、かのドーリトル中佐がかん行した東京空襲の満一年目たることをさとらぬハズがない。にもかかわらず、かつぎ屋の山本五十六は、まるで人形のように、運命を甘受しているかに見える。何故えだろうか？ これこそ、筆者の年来の疑問であったが、既出公開資料の総括と再検討によって、ほとんど全身震撼的な仮説にたつてきたのである。

その仮説とは、山本五十六の死は、巷間顕言されているような、ロッキードP-38の射弾による機上戦死にあらず、ラバウル出発

前の既死（服毒自殺死？）ではなかったか、というよみである。

と言うのも、山本長官一行の出発にさいして、異常なまでの人ばらいが行われ、嚴重な護衛つきの飛行を進言した第三艦隊長官とその首席參謀高田利種大佐が、長官の見送りさえゆるされず、この日早朝にトラック島にむかわせられているからである。

「そこで、高田大佐は、小沢中将の意を体して、連合艦隊の參謀たちに、もし、山本長官がバラレに行かれるならば、空母部隊の全力をあげて長官機を護衛したいと申し入れた。これに対し、連合艦隊の首席參謀黒島龜人大佐は、その要なし、と即座に高田大佐の提案を断った。その後、両者の間に激論が戦わされたが、連合艦隊の考えは変わらなかった。それだけではなく、第三艦隊司令長官は十八日早朝、トラックに帰るようこの連合艦隊側の意向により、小沢中将らは、山本長官機の出発に先立って、ラバウルの東飛行場を飛び去ったのであった⁽⁴⁾」。

更に言えば、世に言う山本五十六の『死体検案記録』こそ、これを作製した当の第一根拠地隊軍医長海軍々医少佐田淵義三郎氏が、自からでっちあげた書類であることを言明していたのである。「『死体検案記録』」

連合艦隊司令長官海軍大将 山本五十六

右者昭和十八年四月十八日午前七時四十分頃「ソロモン」群島方面に於て搭乗機敵闘機の攻撃を受け不時着即死、同月二十日午後四時遺骸を運搬し来れるを第十五号掃海艇上に於て第一根拠地隊司令官海軍少将板垣盛、連合艦隊參謀海軍中佐渡辺

安次、南東方面艦隊軍医長海軍々医大佐大久保信、第八艦隊軍医大佐内野博立会の上検死するに第三種軍装を着用し長袴の左膝蓋部、左大腿部並に上衣背部に夫々し字型の裂目あり、上衣左前下部に拇指圧痕大二個の焼痕を認む航空靴は右側先端に破孔あるも同足部に損傷を認めず、着用せる手袋に血液の附着なし、「ワイシャツ」左半部は血に染む遺骸は一般に軽度膨化し、躯幹に尚死斑を認め顔面のみ既に腐敗現象を伴う、身体に次の如き創面あり

一、左骨胛骨略中央部に小指頭大の創面ありて射管は内前上方に向う

二、左下顎角部に小指頭大の射入口、右外背部に拇指圧痕大の射出口を認む

右により顔面貫通機銃創、背部盲管機銃創を被り貴要臓器を損傷し即死せるものにして死後推定七十時間を経過す

昭和十八年四月二十日

第一根拠地隊軍医長 田淵義三郎⁽⁵⁾

とあるが、蛭川親正著『山本五十六検死ノート』によると、「この件かくして田淵氏は、明確に語られるのである。すなわち、—— 検案場所は体裁上、変更して、掃海艇上において行なったかのようにしてあるが、実際は当日の二十一日……と、ブインの根拠地隊の病舎の北のジャングル内で行われたと言う。

更に言えば、本文の死亡推定時間の七十時間のところには、欄外に田淵氏の訂正印が捺印され、六十時間に改められているので

ある。

この点に注目した蟻川氏は、二十日は午後四時までで十六時間、十九日はまる二十四時間、十八日は午前七時四十分から逆算して十六時間と二十分経過、都合五十六時間と二十分となるとし、死後六十時間経過では、山本長官はラバウル出発日の十八日の午前四時には死んでいたと言う推定も理屈の上では成立するが、検案書の言う十八年四月十八日午前七時四十分が正しいとすると、自信をもって死後五十六時間となぜ断じないのかと言っているが、訂正以前の七十時間をとると、大将は十七日午後六時すでに死亡していたことになるのでは、とこの文書の矛盾をついたうえ、「ふしぎに思われることは、連合艦隊司令長官、海軍大将である人の記録が、推定時間とはいえ十八日午前七時四十分戦死と断定しておきながら、二十日の午後四時に死体を検視して、死後六十時間の経過で、『十七日午後六時』に死亡していたことになっている。こんなかんたんな計算に、どうしてこれほどの手間、ひまをとらねばならなかったのでしょうか」としておられる。

ここまでよんで来て本研究者の安西は、思わずハッとするような啓示を得、息をのんだのである。原文の死後七十時間経過をとると、山本大将は、ラバウル出発前日の午後六時既に死亡していたことになる、と蟻川博士はのべているが、その心はそのようなことは、不可能と言っておられるにすぎない。が、本論文の安西説のように、山本長官がミッドウェーからガダルカナル戦惨敗の責を痛感して本当に前日（つまり十七日）の夕刻に自決死亡せ

られたとすると、かえって辻つまのあうことがいくつか出て来るように思われる。

と言うのも、先述の奥宮正武中佐著の『ラバウル海軍航空隊』の二二三頁に「人生には縁がつきものであるとの例えの通り、角田中将は山本大将と同じ新潟県出身で、個人的には同郷の後輩と先輩の間柄であった。一方、私は長官が海軍次官の頃、結婚の媒酌をしていたのだという特別な間柄であった。そこで、十七日の夕刻、私は角田中将に従って山本長官に挨拶に行き、直接話をうかがう機会があった。その節、長官が最前線に來られた記念に簡単なものでも一筆書いていただくよう希望していたが、長官に急用ができたために見送らざるをえなかった」としておられるが、極端を言えば、山本長官は、この直後に自決されたと言う仮説もなりたたなくはないのではないか。

と言うのも、同じ奥宮正武氏が、『さらば海軍航空隊』の中で、第三艦隊司令長官とその幕僚がいけないことの原因が、連合艦隊の首席先任参謀黒島亀人大佐との激論のはて、長官を見送ることさえはたせなかったと大書されていたからである。

これは、奥宮氏が、同じ頁で、「海軍の慣例から当然そこにいると思っていた第三艦隊長官小沢治三郎中将と同艦隊の幕僚がいけないことであった。しかし、その時、私は、それがどのような意味をもっているか知る由もなかった」と附言するほどにシリアスなものであった。

とここまで論じて来て筆者がはしなくも連想々起したのは、世

に山本五十六長官の懐^{ふところ}刀といわれ、二番機に乗っていて撃墜されつつも生残り、二年半後の昭和二十年八月十五日に帝国海軍最後の特攻隊をひきいて自裁された参謀長宇垣中将の有名な戦時日誌『戦藻録』の中の、奇妙な一節である。

「戦藻録第六卷（昭和十八年一月一日より四月二日にいたる部分）は戦略方針大転換の時機にして極めて重要な記録なれども、元聯合艦隊先任参謀黒島亀人少将が極東軍事裁判証人として出廷の際、遺族より借受持参せるが省戦集中にて紛失せり……」⁽⁴⁾との一節だ?!

この一見偶発事件と思われることの重大性については後にふれるとして、このように言っているにもかかわらず、紛失しているのは昭和十八年一月～四月二日までの部分で、四月三日から後の部分は、どう言うわけか逆に残って公表されているのである。

仮に謀略の魔手がおどっているとすれば、サニタイズ（情報の人畜無害化）されているのはむしろ失われた一月～四月二日の部分だと思われる。

ここではしなくも筆者が再想起するのは、当日は陸戦服を着ることと了解しておいたのに、こともあろうに、艦隊軍医長と主計長の二人だけが、純白の第二種軍装をして来た事実である。⁽⁵⁾参謀長の宇垣中将自身は、これをかなり非難がましくかきたてているが、先ず第一に考慮すべきは、「黄金仮面」とアダ名されたほどの甲冑相貌者であった宇垣中将が、例え、私物の日記においても、本心をみすかされるような記事を残したろうか、という問題であ

るが、筆者は、むしろ参謀長の宇垣中将は、ついに終始事の深層（あるいは真層か？）をしらされなかったのではないかと推している。

この二人の高級将校の白服は、ラバウル基地をとりまく密林にひそむ敵の残置謀者はもちろんのこと、ひそかに遠くの物影から一行の出発を見送っていた味方将兵の目にも、それがトレードマークとなっていた白服の長官と参謀長とみせかけるパフォーマンスだったのではなからうか？

このように考えると、いくら司令部先任参謀が「虎のいをかるキツネ」だったとしても、かりにもれっきとした艦隊司令官とその参謀を、まるで子供のつかいのように、見送りさえゆるさず、追いはらったかのナゾがすけてくるように思われる。

非常に大胆に仮説すれば、ラバウル出発事に三種軍装（カーキ色の陸戦服）をきて一番機にのった山本らしき小男は、一見彼に似ているが長官ではなく、彼の影武者であり、長官自身の体は、一式陸上攻撃機の胴体中部の両舷にはり出している卵型の側方銃座席の一つ、右舷機銃座に、座わり往生死の型で、しばりつけられていたのであろう。

東宝映画を始めとする、いわゆる山本五十六の最後を扱った映画とうでは、長官は例外なく、前方コックピットの中でも最も眺めのよい指揮官席に座しているように演出されてしまうが、事実とはほど遠い。長官の体は始めからしまいまで、胴体中部右舷銃座席に縛りつけられてあり、⁽⁶⁾左舷のやはり側方銃座にいた軍医長

の遺体ともども、ほとんど全く無傷でよこたわっていたそうである。

仮りに長官が、コックピット内にいたのならば、正副操縦士や搭乗整備員の遺体がそうであったように、火災により黒こげにやかれていたか、万一そうでなくても、激突のショックでコックピットの天蓋を破って飛び出し頭部や顔面がいちじるしく損じられていて当然と思われる状況だが、救出作業体験者の証言は、陸海共に、長官の身体にはほとんど全く傷がなく、多少の損かいはあっても、血は全くみられず、生ける人のようにしかと愛刀をにぎっておられたというが、私見によれば、この御姿そのものが、死後硬直を傍証しているように思われてならないのである。

山本長官の座り往生死体の方へ、あたかもにじりよるような姿でことされていた高田軍医長については、死体検案書をものした田淵少佐自身が、「いったい高田軍医少将は、どうして死んだのだらうと、じつは私もふしぎだった」とのべているが、これは全くおどろきを通りこして、語るにおちているのではないか。田淵氏によると、原因不明ともかけないので、全く弾痕も出血もないが、熱傷とか頭蓋骨折で即死と了解しておいたというのである。思えば、陸軍部隊の要員は、二番機の墜落直後、洋上脱出して岸辺へと向う宇垣参謀とパイロットに向って三八式銃を連射している。陸軍の人々の多くは、落ちて来たのは米機と誤判していたのである。

救出に向った一部の兵士の証言によると、先行していた他隊の

兵士が、墜落現場の方向に対してモーレッツな射撃を行っていた。山本五十六の身体に後になって生じていたという小指大の銃創は、ひよっとすると味方の弾によるものかもしれない。

田淵少佐は、茶毗たびにふす直前に、山本の銃創をよくみとどけるため、かつまた江田島の教育参考館にもちかえろうと、長官の衣服を脱がせようと計ったところ、渡辺参謀に大喝制止されたという。

『山本五十六検死ノート』著者蛭川博士は、最初に無傷の五十六の遺体にふれた兄の蛭川陸軍大尉のメモをふまえ、後になって大将の遺体につけられた傷穴が、とうていロッキードのもっていた大口径銃砲のそれとは考えられない、味方の三八式めいた穴だったとしておられる。

それにしても、不思議なのは、いくら味方の制空圏内と判じていたといえ、あれだけの長々とした行動予定電をうたせた後のりこんで行く長官機の防衛努力が全くおざなりどころか、大切な左右の中部側方銃座に、二人の将官をのせてしまい、結果として一番機を無防備に近い状況にもっていく不思議さは、どう説明すればよいのか？ 長官機の撃墜されるのをねがっていたとしか解せない不思議な行動である。

思えば、二十一日午前八時ごろに、山本大将の遺体と対面、始めて検案作業にかかったと当の田淵少佐が断言しているのに、何故公式の検案書は、『二十日午後四時……』と作意するのか？ 連合艦隊参謀の大半が一きよになぎたおされ、参謀長と主計長が

病床にあるのだ。残務処理にあたる参謀は、先任の黒島中佐と戦務参謀の渡辺中佐をおいてない。

いくら四が本来は山本長官の誕生日の四月四日ならみだつたとは言え、何故エミッドウエイやウエークで凶数の相を帯びて来た四の日や、四のつく時刻に追連動しようとするのか？ 長官のめでたい誕生日たる四月四日に大作戦を、というのならわかるが、山本が最もいやがっていた四月十八日（ドーリトルの東京大空襲の記念日だ！）に、長官を危険な旅に出すなど？！ いったい山本長官がもつとも目をかけてやっていた二人の参謀が、長官の厄日や厄時刻数ばかりえらんで、イヴェントを構築しようとするのは何故えか？！

が、東京の海軍省や軍司令部とて、この狂い業には人後に落ちずの行動をとっている。

あろうことか、山本の不名誉記念日であるミッドウエイ敗戦の日日も同じ満一年目の十八年六月五日に、彼の国葬をとりおこない、結果的には米側に二重の勝利感をあたえてしまふのだ？！

今から十九年前に筆者が月刊文春に「四に魅いられた日本海軍」を発表した時点では、ごく単純な偶然のわざ、四のつく事象の全くの偶発とみなしていたが、その後にはえられた多くの悲劇的データを総括して行くにつれ、むしろ日本海軍の参謀部、なかななくGF参謀の中に、わざわざ四の呪いの方向へ、イヴェントを構築することに、狂気じみた固執をみせる人がいるらしいのを見、全く全身震憾的な恐怖さえかんじてしまふのである。

1 ルーレットをやる山本五十六

ドストエフスキーの性格の深層に迫る一文フェレップ・ミラーの「ルーレットをやるドストエフスキー」ではないが、この冠頭詞はわが山本にこそピッタリだ。彼こそルーレットにチェス、碁に将棋にポーカーにブリッジとあらゆる賭け事に手を染め、モナコのカジノで勝ち過ぎ店がつぶれると三拜九拜された逸話の主。ハワイ作戦中心を進言する部下に、「いくら僕がブリッジやポーカー好きだからと言って、そう投機的投機的と言ふな」と応じたなど今や有名だが、既出の山本伝や回想録の類は、この性癖を心理的盲腸サイコクソペンディクスの様に切り棄てようとする。が、深層心理の眼鏡で見れば、かく賭け動いてやまぬ指こそ、内心に直結する心理的索引指だ！

彼の賭心ほとばしる爪先こそ、ミッドウエイの悲劇の立役者南雲中将の爪かみ癖にも増して内心の機微に穿孔貫入する消息子ソフンデなのだ。

真珠湾への奇襲の可能性や誇り高い日本人が有事の際、のるかそるかの投機的行動に出る危険性のある事は、親日家にして第一級の米外交官でもあったグルー駐日大使の報告書にも剔抉されているが、五十六こそわが日本人の性格の深層に潜む粘着気質（礼儀正しく、事物にも、他者にも粘着的に対応。愛郷心強く秩序を尊ぶが、忍耐の果て突如撃発する）を凝縮したような人物。その瞬時も静止せぬ爪先こそは、彼の対人態度を貫ぬく烈々たる闘

志と不可分である。

2 軽井沢の別荘——潜航し伏在する家族愛

思えば、今日山本家が軽井沢に別荘を所有していた事を知る日本人が幾人あるだろう。それは博才沓掛時次郎(長谷川伸の筆先から創造されたように一般には言われるが、徳という土工のモデルがあったと作者自身が言っている)ゆかりの沓掛から北上すればさほど遠からぬ千ヶ滝にあったのだ。世には五十六が家庭をかえりみず某々女に魅入られたとの俗説さえあるが、内実はむしろ逆。いち早く病弱の妻子に山荘をゆるすほど細やかな愛情を注ぎつつ、その片鱗もうかがわせぬ粘着氣質的処世で、茶聖千利休のそれを思わすのだ。この様な性格特徴に対し、クレッチュマー博士の性格と体格の相関説を援用すると、武人や博徒や禪者には筋骨たくましい闘志溢れる粘着氣質が多いとなる。身体つきがかたまる中年以降の山本五十六の体格は、がっしりした筋骨体。氣質性癖共に驚くほど粘着的だ。この性格者は、不断は過礼症と言われるほど礼節をまもり(山本が上下の別なく厳正な敬礼を行い、服装拳止にみだれをみせぬ事は有名)口数少ないが、時と場により烈しい感情の噴出やむき出しの闘志を發揮する。

更に言えば、五十六に見るように一見緘黙に写るが、少数の心をゆるす友には内心をさらけ出し深く交わる一方、対世間には心をゆるさない。例えば、緒戦期、参謀の一人が、真珠湾やマレー沖の大勝祝いをのべ、郷里長岡での提灯行列に言及すると、その

同じ連中がやがて彼の家に石を投げに来るだろうと、不信をあらわにした発言で応じている。

五十六が全身投機的に仕事にも遊びにも専心没入。信念をまげず、正に粘着的に日独同盟に反対し続けた事実。航空出身の子飼いの部下さえ投機的と危ぶむ真珠湾やミッドウェイ作戦構想を絶対ひっこめず、信念として強行した事は今や誰知らぬ者のない歴史の過去だが、粘着者の枠組でこそ了解可能な心理的事実でもある。この粘着氣質の上に、北方系にいちじるしく、孤高性や思弁性や創造性とうに一段と強い分裂氣質(宮城博士の県民性の調査でも新潟県は分裂氣質度が最高)がくわわり、粘着氣質の闘志型でありながら、いち早く新分野たる航空の将来を先取しえたのだろう。

これとは対蹠的に、日露戦争の二〇三高地↓ノモンハン↓ガタルカナルへと続く日本陸軍の白兵突撃の墨守性などは、他の氣質を混じえぬ唯保守的粘着だったと仮説しよう。再思すれば、元来は外来文化の茶や花はもちろん西洋軍事学や技術でさえもが、一度日本に根着くと、煩瑣な手続きの強迫症的反覆を絶対化する道化の極に入ってしまう。その最も卑近な例に、明治三八(一九〇五)年に制式化した小銃Ⅱ三八式歩兵銃を、最新式の自動小銃とレーダーの支配する第二次大戦(明治三八年から数えて、三十三数年後から四十年後になる)期まで固執。白兵突撃の前には敵は必ず敗れるとの信念を楯とした日本陸軍とか、当の英米本国人さえ違和感をもつ受験専用の単語や文法の反覆強迫的学習でことた

れりとする英語教育法がある。

山本五十六を頂点とし、彼の存在に象徴される海軍は視野狹窄的な一般人に比してはるかに柔軟思考。国際政治への関心や新型航空機の開発や兵器体系の整備など墨守一本槍ではなく茶聖利体の深化させたわび茶道や茶花にも似た創造性や革新性に溢れていた。とは言うものの、山本のルーレットをやる指先が象徴する対人態度は、やはりノルカソルカの博才的な粘着度高く、GF長官としての行動（危機の時代においては）は、終始 投機的作戦の反復強迫におちいつている。

ともあれ、人の性格は遺伝的性格（血筋とその組合わせに由来する気質）のみで成りたつてはいない。人それなりに彼の心理的前歴現象とも言うべき、独自の成長体験 過去をもち、各自の置かれていた環境風土という坩堝や窯が個性を焼きつける。五十六の来歴を見れば、その基本気質（先述の粘着気質プラス分裂気質の獨創性濃い闘志型）が、圧倒的な父像に対する強く深い劣等感情と、それに打ち勝ち飛翔したいと希求する過剰補償作用により、ひどく過荷電されたかに見える。五十六は小男だが、父は大男。エネルギーで、先妻との間に四人、五十六の母との間に三児 計七人の子女をもうけている。

五十六は、その名が傍証するように、父五十六才の時の子で、末子でもある。子供が父母兄妹に始まり広く先行し先在する大人に尊敬や愛を感じつつも、一方では強度の劣等感を芽生えさせられ、これを克服しようとする努力が習性となし、人の生き方 性格

となるとは、同じ精神分析派でもフロイトとは一味ちがうアドラーの説くところだが、五十六がその父五十六才の児で、六人も兄弟（その半数は親子ほどの年差のある大人）がいたことは（普通の家庭の末子ならばチャホヤされると太平洋感覚をもつが）山本の場合にはむしろ加速化された焦慮感となり、強迫的傾向を増幅させたろう。彼の猛烈な勝気については、いくら五十六さんが何でも食べると言っても、鉛筆はとけしかけた大人の驚きを尻目に、本気で鉛筆を燕下したという逸話にも顕化しているといえよう。

更に、渡辺幾治郎氏の『史伝山本五十六』には、人前で父五十六才時の児であることに触れられた山本が、不快の相を隠はなかつたとある。

早くから宣教師の宅に出入（父の日記に度々五十六ヤッへ行く、とある）、米人士官のように聖書を机上に置いていた事など、粘着気質の宗教性とも了解しうるが、父に象徴される旧来的保守主義への心理的反撥であったかもしれない。いずれにしろ、五十六の言行は、不断は折り目正しく礼をつくすが、筋の通らぬ事にはいかなる高位高官にも遠慮や手かげんをせぬ闘志性が目だつた。

粘着気質の勝ち気としても了解がつくが、発達心理学的尺度をあてて、幼少期を貫通する対父的な葛藤の形が、社会生活面に転移転調されたと看することも可能である。この種のエディプス心理は、細長型身体の分裂気質者や肥満体の多い循環気質にもあるが、屈折した烈しさは粘着気質者にこそ一段と濃く出るようだ。

古来から歴史上に名を成す武将には、実父や実の兄弟とさえ骨

肉合いはむ死闘を演ずるものが多いが、母には例外なく孝養をつくすのも以上の心理的機制で了解可能だ。

山本の場合は時代も違し、艦隊勤務と海外出向の更互する忙しい人。物理的にも孝養まゝならぬ裡に父母をなくすが、母の危篤時のみ帰省する。女性を見れば、やたらおおう癖のあったのも失われた母に対する孝養心飢餓をうめあわす代償行為ともみられよう。

母性思慕の傍証に礼子夫人との結婚が三十六才時である点もあげよう。晩婚理由に、友人や先輩の借財肩代わりの美説をあげる人もあるが、牧野子爵を始め山本の人物と将来をみこんだ高官有力者が競って良縁を世話しようといとしきり動いたのに、その総てをしりぞけ、一顧もしなかったのが五十六である。人情家で金権高位に屈せぬ粘着気質という心理的甲冑の背後に、生母への強い思慕があったのだろう。

3 ミッドウェイ海戦の謎——速戦即決と人情

それにしても、山本ともあろう作戦の神様が、あの高速空母機動部隊を駆使するハワイ作戦の半歳後のミッド沖海空戦に、何故え大和中心の保守陣形を採用したのか、永遠の謎とするのが通説だが、このミッドウェイ作戦こそハワイに倍加して顕化し増幅されて来た山本の（対米劣等感に裏打され、その心理的性^{さぶ}と来歴^{そだち}によって加速化された）絶望的な焦慮感と反覆強迫症を思わす賭心の表出だろう。米の工業力を中心とする長期戦貫徹能力への底な

しの恐怖が、他の鈍感人に欠けている異常なまでの先取心や賭心とないませになり、何がなんでもミッド沖での速戦即決へと、揮下艦隊ばかりか、結果的には国民はおろか、日本史の歩みもかりたてることになったのである。

五十六の新知識、特に航空への可能性と未来への見通しのたしかさは、今や誰しらぬものない歴史の事実となっているが、山本が航空本部長として自から開発した海軍の戦略攻撃機とも言うべき一式陸上攻撃機をかって、不帰の旅に出られたのは、なんたる運命の皮肉であろう。

この問題は、複雑多方面にかかわるので、以下、山本五十六怪死のナゾとして、更にこれを検討してみよう。（続く）

注

- (1) 奥宮正武『さらば海軍航空隊』昭和57年朝日ソノラマ。
- (2) 安西二郎「四に魅いられた海軍」昭和41年9月月刊文芸春秋。
- (3) Ibid., p. 310.
- (4) 奥宮正武『前掲書の pp. 273~274.』
- (5) 蟻川親正『山本五十六検死ノート』昭和46年光人社 pp. 156~157.
- (6) Ibid., pp. 158~159.
- (7) Ibid., p. 171.
- (8) 奥宮前掲書 pp. 273~274.
- (9) Ibid., pp. 273.
- (10) 宇垣 纏『戦藻録』昭和27年出版共同 p. 275.
- (11) Ibid., p. 292.
- (12) 蟻川前掲書 pp. 47 & 97.

- (13) Ibid, p. 200.
- (14) Ibid, p. 174.
- (15) Ibid, p. 42.
- (16) Ibid, p. 186.
- (17) Ibid, p. 170.